

氏名	たけ　うち　つな　ふみ 竹　内　綱　史
学位(専攻分野)	博　士　(文　学)
学位記番号	文　博　第　436　号
学位授与の日付	平　成　20　年　3　月　24　日
学位授与の要件	学　位　規　則　第　4　条　第　1　項　該　当
研究科・専攻	文　学　研　究　科　思　想　文　化　学　専　攻
学位論文題目	ニーチェ哲学研究序説

論文調査委員 (主査) 教授 氣多雅子 教授 藤田正勝 准教授 杉村靖彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ニーチェの『悲劇の誕生』から『悦ばしき科学』までの思索の歩みを発展史的に考察し、後期ニーチェ哲学の名高い著作群を理解するための新しい視点を獲得することを目指すものである。本論文が扱うニーチェ哲学の前半期は従来、「初期」と「中期」に分けるのが定説となっており、「初期」と「後期」、あるいは、「中期」と「後期」を、扱われているテーマ的に繋げて理解することが通例となってきた。本論文はそうした通説に抗い、「初期」と「中期」の継続性を明らかにする。内容は三部から成る。

第一部では、処女作『悲劇の誕生』(1872)を扱う。この書が良くも悪くも「処女作」であることは後年ニーチェ自身も認めるところであるが、後々まで続く彼の問題意識や方法論が非常に荒削りのまま詰め込まれていると言ってよい。論者はまずそこでの議論の射程と限界を見極める。

第一章は、同書の最大の論点である「世界の是認」をニーチェがいかに問題にしていたかを扱う。『悲劇の誕生』の主題はもちろん「悲劇」だが、ニーチェにとって、「悲劇」の意味は芸術作品に留まらない。芸術としての悲劇は、「悲劇的なもの」を作品として表現にもたらしている。そして悲劇的なものを中心とした「文化」こそ、現代においてこの世界で生きる意味をもたらしてくれるのだ、とニーチェは考える。つまり、ニーチェは芸術作品としての「悲劇」を分析することを通じて、悲劇的なものの謎に説明を与え、それに世界の是認の可能性を託すのだ、と論者は言う。

ではその「悲劇的なもの」とは何であるのか。それは美学史上に名高い「悲劇の快のアポリア」、すなわち、人が悲しい劇をみて悦びを感じるという謎である。悲劇とは、「悲しい」のに「楽しい」ものである。悲劇とは悦びなのだ。けれども、ニーチェは単に「観劇」が悦びをもたらすということだけを論じているのではない。その「応用」こそが重要だとして、悦びであるという悲劇の核心をこの世の生に適用するのである。生は悲劇だ、いかに苦しみに満ちていようとも生とは悦びだ、と。ニーチェはこうした問題を、ショーペンハウアーの影響の下、有名なアポロンの-ディオニュソスのという対概念を用いて探求し、一種の形而上学によって基礎づけたと論者は見る。

第二章では、ニーチェが批判する「ソクラテスのオプティミズム」とは何であるかを明らかにし、その批判の背景にある歴史哲学と『悲劇の誕生』が目指す「悲劇的文化の復興」の戦略を論じる。オプティミズム批判はこの世の悪から目をそらすことに対する批判である。ニーチェはそうしたオプティミズムが学問＝科学(Wissenschaft)を営む「理論的人間」の根底にあることを暴き、この世の悪を直視すること、それでもこの世を生きるに値するものと信じること、つまり「悲劇的文化」を現代に復興させようとする。

そうした目論見の背景には古代ギリシア史で似たようなプロセスが存在したという洞察があり、それが現代においてまた起こる(ないし起こす)というニーチェの発想がある。だが、そこには古代ギリシアの悲劇時代が「復活」という考え(シナリオ1)と、より冪を高めた形での新しい「悲劇時代」がやって来るという考え(シナリオ2)の二つの傾向があり、『悲劇の誕生』の論述は前者に引張られてはいるが、後者の発想が後のニーチェ哲学の発展にとって重要である。とりわ

け、「自らのパースペクティヴの相対性を自覚する」という反省の契機をニーチェが取り出していることに、論者は注目する。この反省は「批判」の契機であり、後の「パースペクティヴィズム」、そして「実験哲学」を準備するというのである。

第二部では『反時代的考察』（1873-76）を扱う。この書はニーチェ解釈上ではあまり重視されないことが多いが、論者はこの書を、ニーチェが「哲学者」として自己を規定し自己の立場を固める中で重要な位置を占めるものと見なす。

第三章では、第一『反時代的考察』のシュトラウス論を扱う。同書では、文化そのものの存在を否定する俗物オブティミズムを前にして、文化は所有されているものではなく探求すべきものとして規範化された。また、シュトラウス論と同時期の有名な遺稿『道徳外の意味における真理と虚偽』は、文化の問題を真理論へと接続しようとしている。まだはっきりとはしないものの、ニーチェは明らかに、あらゆる「真理」は歴史的なものだ、という結論に向かっている。そしてシュトラウス論末尾での「真理を語る」ことが「反時代的」であるという議論を総合すると、真理を探究する哲学の任務は将来のために「反時代的」であることを引き受け、歴史の駆動力となることなのである。しかしながら、文化概念の規範化も真理論も、ユートピアないし客観的真理の存在を肯定する形で、形而上学的歴史哲学（シナリオ1）に未だ規定されている。

第四章では、第二『反時代的考察』において時代批判としての哲学という発想が、より方法論的に洗練されることが論じられる。そこで発見された「批判的歴史（学）」という歴史認識のあり方は、風習・習慣を歴史（学）的認識によって批判し、特定のコンテクストから切断し、別のコンテクストを生きることを説くという実践である。現在われわれがごく「自然」なものを見なしている人間の性格を吟味し、由来を問い尋ね、不正を暴き、その認識をもって徐々に人間の「自然本性」をずらして行く試み。一種の「批判理論」という学的認識の新たな可能性をニーチェは開拓したのである。同書で使われる「正義」という概念は、ニーチェが多くの正しい歴史に引き裂かれそうになる近代の運命を受けとめて、できる限り多くの歴史を生き得るよう努力することを求めていることを示している。

第五章では、第三『反時代的考察』を主に取り上げる。同書はカントの啓蒙論文との際立った類似を見せているが、カントおよびショーペンハウアーと対照させることでニーチェの主張が浮き彫りになる。ニーチェ哲学の核心には自律という思想があり、それはカントによる啓蒙のプロジェクトを引き継ぐものである。一方、普遍性を拒否し「個体化の原理」の内部に出发点を定めるという点で、カントではなくショーペンハウアーに同意している。しかしながら、ニーチェは同情による個体化の破棄ではなく、自律の徹底による個々の歴史化を敢行し、新たな倫理の樹立を旨とするのである。世界の是認を託されるのが教育者としての哲学者という個人であり、自己の唯一性を貫徹することで新しい倫理を構築することが目指される。そしてその生き方を範例の域へと引き上げるよう努力することが、ショーペンハウアーという一つの「実例」を通して提示された。そしてニーチェ自身も自らを一つの「実例」として提示するという戦略を見出すのである。

第三部では中期に属する『人間的、あまりに人間的』（1878-80）『曙光』（1881）『悦ばしき科学』（1882）を扱う。

第六章は、近年のニーチェ解釈で取り上げられることの多い「運命愛と自己創造のパラドクス」を、「自由精神は自由意志を否定する」という『人間的、あまりに人間的』のコンテクストの中で明らかにする。この書の中心テーマである「自由精神」とは、根拠なく「普通」に埋没することを批判し、唯一無二なる個人として生きるような精神態度である。これは第三『反時代的考察』の中で構想された「新たな倫理」の結実であると考えることができる。その前提として、自らの可謬性を自覚することが肝要である、という洞察がある。そして可謬性の自覚を阻むものとしての形而上学を排し、ニーチェは「歴史的に哲学すること」と呼ぶ立場を表明するが、これは第二『反時代的考察』の「批判的歴史」のヴァージョンアップである。行為の「奇跡的起源」である自由意志の想定を却下し、過去に対する責任賦課によって構成される主体ではなく、未来への責任を担う主体として自らを鍛えることが自由精神の核心にある。不確定ないし不透明な未来に対し、より「良い」方向へと自らの「性格」を徐々に変化させて行くことへと向かうのだ。

第七章では、ニーチェの実験哲学構想を詳らかに論じる。『曙光』と『悦ばしき科学』でニーチェは「実験哲学」という新しい哲学の構想を得る。それは「世界是認」「反時代性」「批判的歴史」「新しい倫理」「自由精神」といったこれまでのニーチェ哲学の発展の最終結論と言ってよい。そして、「後期」のニーチェ哲学はこれの中で動いて行くのである。

『曙光』でニーチェは「習俗の倫理」という概念によって倫理的なものの考察を行っている。それによれば、倫理は「真理」に基づいているという考え方は、太古からの「習俗の倫理」に依拠している。しかし「神の死」によって、そうしたロジックは信用を失い、「道徳の空位時代」が訪れる。だが個々の立場に立つニーチェはそれを好機と捉え、まさに実験によっ

て人間の可能性を広げようとするのである。ニーチェの「実験」は記述的な側面を一方で強く持っている。人類は太古から実験を積み重ねて歴史を紡いできたのだ、と。そして過去の歴史をそのように記述し再構成することによって、ニーチェは意識的に「実験」を行おうとしているのである。ここには記述的側面と規範的側面との結びつきがある。

けれども、逆に考えると、ニーチェのこうした語り口自体が、「神の死」によって初めて可能になっている、とも言える。絶対的なものは存在しないということが明らかになることによって、全てが仮説的性格を帯び、実験というあり方が際立ってきたのである。ニーチェが「太古」以来の自由精神的個人を語ることは、現在の自由精神の視点からのみ、可能であった。つまり、ニーチェによる「習俗の倫理」の再構成とニーチェが言う「われわれ」自由精神の誕生とは共属しているのである。歴史を語る視線と内容とのこうした共属関係、これは「批判的歴史」や「歴史的に哲学すること」にあった発想の帰結であるが、こうした関係意識の先鋭化が言うまでもなく後の「系譜学」を形作ることになる。そしてそこに単なる方法意識ではなく、過去を受け容れ過去を背負って未来へと自らを賭けるという生き方、すなわち「運命愛」があるのである。

『曙光』に続いて『悦ばしき科学』では「実験哲学」という発想がダーヴィニズムと結びつけられ、「血肉化(Einverleibung)」という語が重要な意味を帯びてくる。実験とは認識を自らの身体を通じて検証することなのである。血肉化という語には身体(Leib)という語が含まれているが、もともとは同化・吸収・併合などの意味を持つこの語を、ニーチェは「異物的なものを自らの身体に取り込むこと」という意味で用いている。モデルは有機体の栄養摂取であるが、この概念をニーチェは実験という場面にも適用する。

ニーチェはここで『曙光』で論じられていたことの視野を広げた語り直しを行っている。けれども、ここでは単なる「誤謬」ではなく、「根本誤謬」が問題にされるに至っている。それらは「真理」ではないが、たとえ「真理」ではないと認識したとしても、(少なくとも今のところは)人間はそれ無しでは生きていけないものなのだ、と。長い時間の中で人間という「種」の「本能」となってしまった「誤謬」、人間の最も基本的な「習俗の倫理」である。

こうした試みをニーチェが敢えて行う裏には、もはや「絶対的なもの」への人間の欲望は挫折を運命づけられている、という洞察がある。ニーチェはこの悲劇、ニヒリズムを先取りし、生き抜いて、新たな倫理を構築せんとする。「絶対的なもの」を要請するような「根本誤謬」を取り除く試みを模索するのである。それが現代の人間にとって急務なのだ、と。確かにニヒリズムは絶望を招きかねない。「絶対的なもの」への欲望が人間の「本質」である限りは。しかしニーチェは太古以来の別の歴史を語る。そしてその歴史的運命を引き受けることのできる者、ニーチェの言う「われわれ」自由精神は、新しい世界を求めて「実験」へと向かうのである。

以上のように論じた上で、論者は最後に、「実験哲学」という発想が「後期」ニーチェ哲学をいかに規定し続けるかということの例証として、「永遠回帰」思想がニーチェに初めて到来したときの遺稿断片を読み解く試みをする。この謎めいた思想の詳細な検討は論者にとって次の課題となるが、本論文の段階でこう特徴づける。すなわち、永遠回帰は、実存的な問いとしては、絶対的なものへの欲望の断念もしくは断念の可能性を突きつけているのであり、生きるべき世界としては、人間との和解を告げている、というのである。永遠回帰の世界に生きようと試すことが後期ニーチェ哲学の全てであると言っても過言はないが、このことこそまさに実験哲学の遂行なのである。そしてニーチェは自らを、永遠回帰の世界を生きるという「実例」として、つまり「哲学者」として、示すのである。

論文審査の結果の要旨

本論文はニーチェ哲学前半期の「発展史的解釈」を試みたものである。論者が前半期と見なすのは、ニーチェ哲学を三段階に分ける定説で言うところの初期と中期に当たるが、初期の著作群と中期の著作群との間には、たとえば「啓蒙」や「科学」についての考え方がそうであるように、まったく相反する叙述が見られる。そのために初期と中期の関係をどう解釈するかということは、ニーチェ解釈における一つの困難な課題であった。論者は本論文で、初期の二著作と中期の三著作を詳細に検討し、そこにおける一つ一つの思想を比較分類し、相互の連関を読み解いてゆくことによって、その課題に応えようとしている。論者は自らの試みを「発展史的解釈」と呼ぶのであるが、この言葉には、初期から中期にかけてニーチェの哲学的問いは一貫しており、その問いの深まりを跡付けることができるという論者の主張が籠められている。そして、この問いの深まりは後期においてさらに徹底されると予想されている。

具体的に言うと、処女作『悲劇の誕生』の中には形而上学的歴史哲学の性格をもつシナリオと歴史内在的な歴史観に基づくシナリオの二つが書き込まれているが、前者の方が中心となっているということが、明らかにされる。だが次の『反時代的考察』においては、形而上学性の強い前者のシナリオが大きく後退し、後者の歴史理解がいっそう深められて中心的なものになることを論ずる。そして、その深まりは『人間的、あまりに人間的』における自由精神と自由意志の論考を通して、形而上学を否定するところの「歴史的に哲学する」という哲学の仕方へと結実することを示す。そしてさらに、「歴史的に哲学する」という仕方は『曙光』と『悦ばしき科学』で「実験哲学」の構想へと発展していくことを論ずる。以上が論者の前半期の発展史的解釈の大きな道筋である。論者によれば、「実験哲学」は、「神の死」という事態に立ち向かって世界是認を行うことに向けて構想されるものであり、後期ニーチェの中核となる思想であると同時に最も難解な思想でもある永遠回帰思想と真っ向から切り結ぶものとして、ニーチェのさまざまな思想群から論者によって選び取られるモチーフである。発展史的解釈は後期思想の解明までも可能にする射程において、企図されているのである。

この発展史的解釈によって論者は二つの点で新たな知見を提示し得たと考えている。第一は、ニーチェの初期思想と中期思想の連関を明確に浮かび上がらせた点である。第二はこれまで研究者の間でもっぱら一面的な注目しかされることのなかった『反時代的考察』が、哲学とは時代批判であるという主張を打ち出して、形而上学的真理との訣別を遂行した重要な書であることを明らかにした点である。この二点は確かに、諸著作の丁寧な読解と着実な分析の積み重ねによって本論文がなし得た貴重な成果である。だが、この二点はおそらく専門的なニーチェ研究者にとって有意義だと言えるものであろう。

むしろその二点以上に重要であるのは、論者の発展史的解釈の中で、次の事柄が改めてあぶり出されてきたことであろう。即ち、初期・中期のニーチェの思索の歩みは、絶対的な視座に立つこと、絶対的なものに依拠すること、絶対的なものを把握し得るとすること、そういったことに対する否定を錬成し徹底化してゆく過程だということである。そしてまた、そのような錬成・徹底化を導いているのは、歴史性の把握の深まりだということである。絶対性に立つことの否定の裏側には世界是認の要求が貼り付いており、それが否定の錬成・徹底化とともに幕を高められてゆき、後期の異様なまでの緊張感に満ちた諸思想へと発展していくことが予感される。本論文に描出されているのは、「パースペクティヴィズム」「ニヒリズム」「永遠回帰」などに仕上げられることになる思想が、いわば萌芽状態から次第に茎を伸ばし葉を拡げて開花を準備してゆく様である。準備段階であるからこそ、ニーチェ思想の多様な側面を多様なままに展望することがそこでは可能になっている。それはニーチェ研究を専門としない研究者にとっても、刺激に満ちている。このことこそ、発展史的解釈という方法をとったことの最も大きな成果として評価できる。

ただし、発展史的解釈には、思想発展の推移を追うことに意を注ぐあまり、個々の思想、個々の論点を深く掘り下げることが疎かになるという弱点がある。本論文も例外ではない。また、発展史という性格上、この解釈のもとに後期思想までの確に説明できて初めて、論者の解釈の有効性が真に証明できたと言える。その意味では、本論文の企てははまだ途上にあると言わねばならない。だが、これらのことは本論文の続編への期待をかき立てるとしても、決して本論文の価値を損なうものではない。

さらに本論文は、自らの研究の位置取りを確認しつつ、多くの二次文献を参照し、さまざまな面での研究状況への目配りが行き届いている点で際立っている。1870年代の遺稿の発見や文献学的解明の大きな進展、思想史的研究の進展などにより、現在のニーチェ研究には膨大な蓄積があるが、論者は全力でそれに立ち向かっている。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二〇年二月一九日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。